

母子保健サービスにおける地域住民による 組織活動のあり方に関する研究

石山 節子¹⁾

要約：母子保健を主体に、地域保健の改善と向上を目的とした地域住民による自主的組織である愛育班活動に対する地域住民の評価を把握し、母子保健ニーズに対する愛育班の効果について検討を行った。

見出し語：母子愛育会、愛育会、地域組織、地域健康づくり、市町村、保健所

1 研究目的

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会で推進している住民による自主的地域組織「愛育班」活動から、妊娠中や子育てに関する日常的身近な健康問題と、愛育班員の活動に対する住民の評価を把握し、行政と民間の役割分担、協力関係のあり方について分析することを目的とした。

2 研究方法と対象

全国道府県の中で、県愛育連合会又は愛育会県支部の設置されている6県（秋田・埼玉・山梨・兵庫・香川・大分）を選び、県母子保健担当課を通じて、子どものいる家庭650世帯を対象に愛育班員の家庭訪問時にアンケート用紙を渡し、回収は母子愛育会宛に郵送することとして実施した。

調査期間は、平成5年11月15日から12月25日まで

回答状況は、配布総数650、回答数527（回答率81.1%）だった。

3 調査結果

集計にあたっては以下のグループに分類した。

A 乳幼児がおり、現在子ども1人

B 乳幼児がおり、現在子ども2人以上

C すでに学童以上となっている家庭

D 子どものいない家庭：殆どは成人した家庭

(1) 愛育班活動は役立っているか

住民にとって「愛育班活動は役立っていると思う」と回答した人は、全体で(63%)を占めた。一方「役立っていると思わない」(9%)、「わからない」(27%)となっている。このことは、愛育の思想と活動の理解を深めてもらうための、住民へのPRの積み上げが更に必要であるものと考えられる。

¹⁾ 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会

「愛育班活動は役立っていると思う」と回答した人に“役立っていること”をあげてもらった。その内容は「子育ての情報が得られる」、「子育ての相談相手になってもらえる」、「育児経験のある班員さんの話が聞けて参考になる」、「育児不安の時、班員さんが来て励まされ、安心感が得られる」等、育児のよき相談相手としてあげている。

「地域の人を知る機会になって仲良くなれる」(39%)あり、希薄化しつつある地域社会の中で大切な活動といえる。

学童以上：殆どは成人しているグループで「困ったことがある場合、保健婦さんに連絡してもらえるので安心」(51%)、「班員さんの訪問が力づけになる」(30%)と他のグループよりも多くあげられた。これは、愛育班活動が、母子を基盤としながら地域に住むすべての人々を対象に保健婦を窓口として、愛育班が主体的に健康づくりに取り組んでいる結果であろう。

(2) 愛育班活動の理解

愛育班活動の理解については、いずれのグループも「地域の皆さんの健康づくり」をあげた人が多く、全体で(71%)を占めた。「わからない」と回答した人が(11%)あることにも目を向け“健康で住みよい町づくり活動”であることを実践活動をととして住民に理解してもらうことも必要である。

(3) 愛育班活動の必要性

愛育班活動の必要性については、いずれのグループも「必要と思う」とあげた人が多く、全体で(72%)を占めた。一方では、(1)で述べたように「愛育班活動は役立っていると思う」と

回答した人が(63%)であったことからみて、愛育班活動に対する住民の期待も大きいと思われるが、また、このことが愛育班員の負担にならないように、班長、育成者である保健婦の気配りも必要であろう。

(4) 愛育班活動の今後のあり方

愛育班活動の今後のあり方については、いずれのグループも半数以上、全体で(58%)が「今までどおりでよい」としている。「もっと愛育班員さんに訪問してほしい」(24%)であった。

この愛育班活動に対する意見を自由記載してもらった。全体では「家庭訪問の充実」をあげたものが多い。具体的には“気軽な訪問を。身近に感じるために月1回程度の訪問はしてほしい”“受持ち家庭の全戸訪問を”“家族全員の健康について聞かないと意味がないのでは”等の意見があげられ、また、乳幼児を持つ母親の意見として「独居老人への訪問、話し相手になりたい、お年寄りとのふれ合いをもちたい」があげられていたことは、少数であっても核家族化時代の中で見逃せない貴重な意見である。

次いで、「母と子の交流の場がほしい」があげられており“就園前の子どもを持つ母親同志の交流の場”“親子で気軽に集える場”“悩みや育児について話し合える場”“公民館や児童館など、公的施設を利用し、講演会やレクリエーションの場がほしい”等があげられている。

少子化の中で実態を把握しながら、話し合いと、そのことを実践に移す地域組織“愛育班活動”として真剣に取り組んでいくことが重要である。そのためには、意見にもあがっているように「愛育班活動のPRを積極的に」、「班員

さんの若返りを図る」ことも大切な条件である。

(5) 出産、育児情報の入手先

出産、育児情報の入手先を「友人」とあげたものが多く、全体で(70%)を占めた。次いで「雑誌」(55%)、「本人や夫の父母」(54%)、「保健婦」(44%)、「かかりつけの医師」(31%)、「姉妹」(29%)、「愛育班員」(25%)、「近所の人」(23%)、「県や市町村の広報」(15%)、「新聞」(14%)、「お母さん方のグループやサークル」(11%)、「夫」(10%)等であった。しかし、その他の中に“愛育班だより”とあげた人がおり、今回、設問項目に設定しなかったが、各地区の愛育班で毎月発行している“愛育班だより”も情報の入手先として大きな役割を果たしているものと推察される。

(6) 不安や悩みのある時の相談相手

不安や悩みのある時の相談相手に「夫」をあげた人は(66%)を占めた。反面、(5)情報の入手先では「夫」をあげた人は(10%)に過ぎなかったが、不安や悩みのある時の相談相手には「夫」が1位になっている。次いで「友人」(59%)、「本人や夫の父母」(53%)、「姉妹」(30%)、「保健婦」(23%)、「かかりつけの医師」(20%)、「近所の人」(9%)、「愛育班員」(8%)、「電話相談」、その他となっている。

(7) 子育てに利用したもの・したいもの

子育てに利用したものは「公園などの遊び場」をあげた人が多く、全体で(58%)を占めた。「保健所や市町村の育児相談」(42%)の人が利用している。

子育てに利用したいものとしても「近くの公

園、遊び場」が最も多く、全体で(77%)を占めた。次いで「育児手当ての拡大、増額」(52%)

「子連れで楽に利用できる公衆トイレ」(41%)

、「いつでも利用できる託児施設」・「保健所や市町村の行う育児相談」が各(38%)、保健所や市町村等の子育て学級(37%)、「父親が育児参加できる休暇や制度」(34%)等があげられており、公共施設等の充実を望む声が高い。

(8) 子育てをしていく上で利用したいと思うアイデア

子育てをしていく上で利用したいと思うアイデアの自由記載では、「子どもの遊び場」が多くあげられ、次いで「公共の託児施設」をあげている。子育てに利用したいものと同じく、公共の施設、公園の整備等を望む声が高い。

件数は1件ではあるが、不妊症に対しての補助やアドバイスをあげている。

子育てをしていく上で利用したいアイデアについては、具体的にあげているので、それぞれの立場と役割を認識しながら“住みよい町づくり”を皆で考えていくことが大切である。

4 考 察

住民の自主的組織“愛育班活動”が住民に身近な組織として“健康で住みよい町づくり”のために、充実、発展していくことが、これからの社会にとって重要である。

そのためには、今回のような調査研究も各地域で行い、住民の小さな意見にも耳を傾け、実践する組織として、住民と行政が協力と連携をとりながら進めていくことが大切であろう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:母子保健を主体に、地域保健の改善と向上を目的とした地域住民による自主的組織である愛育班活動に対する地域住民の評価を把握し、母子保健ニーズに対する愛育班の効果について検討を行った。